

大麦多収栽培に向けた越冬前生育量の確保

新潟県における大麦栽培では、越冬前に適正な生育量を確保することが大切です。近年、暖冬少雪傾向となっていますが、積雪地帯では根雪になる前に必要な生育量が確保できないと雪害を受ける危険が高くなります。また、有効分げつ決定期は11月中～下旬、幼穂形成期は12月中～下旬であり、収量に直結する穂数は越冬前の生育状況に大きく左右されます。穂数につながる強勢分げつの早期確保は、は種後40日までの初期の肥培管理が特に重要です。

1 水稲の落水後は暗きよを解放する

大麦は種の作業精度は、天候やほ場の乾き具合に大きく影響されます。大麦作付ほ場の前作が水稲の場合、稲刈り後は稲による土壌水分吸収が無くなり、また、稲わらで覆われると地表水の排水が悪く、ほ場表面も乾きにくくなります。秋の天気は変わりやすく、晴れが続くとは限りません。水稲の落水後は早めに暗きよ栓を開放し、ほ場の乾燥を促し、水稲収穫後はできるだけ早く、周囲明きよ・弾丸暗きよなどの排水対策に取り組みましょう。

2 積雪地帯別は種適期を厳守！

は種の遅れから越冬前に十分な生育量が確保されずに雪害を受ける事例が見られます。また、暖冬で雪害を受けなかったとしても、越冬前から十分な分げつが得られないと、越冬後に発生した弱小な無効分げつが遅れ穂として稔実し、未熟粒の発生が多くなります。表1に示す積雪地帯別のは種適期を厳守し、越冬前に適正な生育量を確保しましょう。なお、極端な早播きも越冬前に節間伸長が始まり、雪害を受けやすくなるので注意が必要です。

表1 地域別のは種適期と越冬前の生育指標

地帯	根雪日数	は種期	越冬前の生育指標
中雪地帯(多雪年)	90日以上	9/20～9/30	葉数8葉以上、乾物重70g/100株以上
中雪地帯(平年)	60～90日	9/20～10/5	葉数7葉以上、乾物重50g/100株以上
少雪地帯(平年)	60日未満	9/25～10/10	葉数5葉以上、乾物重30g/100株以上

3 秋季追肥の積極的施用

秋期追肥は、苗立ち不良や黄化現象の対策技術として実施します。

は種後の目標苗立数は㎡あたり約200本となっていますが、150本を下回るような場合は秋期追肥を施用します。良質茎を確保するため、施用のタイミングは、は種後2週間～1か月を目安とし、遅くとも11月中旬までに施用します。表2に示すようには種後2週間後の秋期追肥により越冬前生育の改善や穂数と収量の増加が見られています。は種が遅れた地域や明らかに苗立数が不足している場合は、茎数確保のため、は種後2週間後の秋期追肥を積極的に施用するように心がけましょう。また、黄化は根圏土壌の窒素不足や窒素吸収の阻害が原因で発生します。黄化症状の進行を抑えるためには、発生の徴候が見られたら、排水を改善したうえで早めに秋期追肥を

施用します。

秋季追肥は施用量が多くなると耐雪性が低下する場合がありますので注意が必要です。施用量は窒素成分で 10a あたり 2 kg 程度を上限とします。排水不良条件下では、追肥効果は得られないので、排水対策を最優先に実施します。なお、越冬前の生育指標に対して、過繁茂なほ場では原則として秋期追肥は必要ありません。

表 2 は種後 2 週間後の秋期追肥の効果 (作物研究センター)

は種後 2 週間後の 秋期追肥	越冬直前の生育		穂数 (本/m ²)	収量 (kg/10a)	千粒重 (g)
	茎数 (本/m ²)	葉色 (SPAD)			
有り	485	28.3	569	502	39.1
無し	363	24.4	456	384	39.9

注 1) 水田転換畑、ドリル播、平成 25~26 年度の 2 年平均

注 2) は種期は 10 月上旬で、は種後 2 週間後の苗立期頃に窒素成分 2 kg/10a を追肥

【経営普及課農業革新支援担当 服部 誠】